

## 困難を克服し意欲を持って主体的に学ぶ生徒の育成

### 一 通級による指導と授業のユニバーサルデザイン化の3年間の実践を通して 一

宮城県蔵王高等学校

教諭 海部裕美子

#### 1 はじめに

高等学校に進学する発達障害等困難のある生徒の割合は約2.2%である。平成28年4月には合理的配慮の提供が国公立学校では義務化され、支援の充実は重要性を増している。また、小・中学校で通級による指導を受けている児童生徒数は年々増加している。

本校は、大学進学を希望する生徒から義務教育段階の学習が十分に定着していない生徒まで、幅広い実態の生徒が在籍している。学習に対して困難を示す生徒、不注意や衝動性から様々な問題が生じている生徒、対人関係やコミュニケーションに困難を抱える生徒など実態は多岐に渡り、教職員も指導に難しさを感じる事が少なくない。また、アンケートを実施した結果等から生徒自身及び保護者が困難を自覚している場合が多いことが把握されている。

#### 2 主題設定の理由

平成30年度から高等学校における「通級による指導」（以下「通級指導」）が制度化された。本校では、令和元年度から通級指導を導入し、生徒の抱える困難の改善を試みてきた。一年目の取り組みにおいて、少人数グループを編成し、個別またはグループでの活動を適宜行う本校の通級指導では、生徒の変容を短期間で確認することができた。しかし、集団で行われる教科の授業において、なかなか力を発揮できずにいることが課題であった。そこで通級指導を導入して二年目からは教職員の理解と協力を得て授業のユニバーサルデザイン化にも力を入れることで、生徒が困難を克服し意欲を持って主体的に学べるようになることを目指したいと考えた。

#### 3 研究目標

通級指導や授業のユニバーサルデザイン化に取り組むことで得られる効果を検証する。

#### 4 研究計画

	通級指導	ユニバーサルデザイン
一年目	<ul style="list-style-type: none"><li>・特別の教育課程を編成する。</li><li>・生徒の思いを反映した個別の指導計画を作成する。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・3つの目標を掲げて取り組む。</li></ul>
二年目	<ul style="list-style-type: none"><li>・卒業後の生活に必要な力の育成と進路の達成を目指す。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・7つのポイントを示して取り組む。</li><li>・考査の範囲と提出物一覧を作成する。</li></ul>
三年目	<ul style="list-style-type: none"><li>・外部機関と連携した就労及び職場への定着のための支援を目指す。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・町内の中学校と合同での研修会を行い、支援の輪を広げる。</li></ul>

## 5 高等学校で行う通級指導の法的位置付けと本校の教育課程

学校教育法第81条第1項で、全ての学校で障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うことが示されている。通級指導は学校教育法施行規則第140条及び第141条に基づき、通常の教育課程に加えたり一部を替えたりして行うものであり、通級指導を受ける生徒については特別の教育課程を編成する必要がある。また、高等学校学習指導要領総則には、通級指導においても単位の履修と修得が可能であることが明記されている。このことを受け、本校では週に2回授業時間帯に通級指導を行えるように特別の教育課程を編成している。放課後も行うことができることとして通級指導を必要とする本人・保護者に提示しているが導入してから現在までの間、全ての生徒が授業時間帯に受講することを選択している。

## 6 蔵王高校で実践する通級指導を受ける生徒の状況

自立活動の指導内容は6区分 27項目で示されている。本校では、特に「人間関係の形成」と「コミュニケーション」に苦手意識や困難を抱える生徒を、医学的な診断の有無に関わらず通級指導の対象としている。本校の通級指導の受講者は2学年と3学年に在籍している。ただし、3学年の生徒については2学年から継続することを条件としているため、新規での受講は受け付けていない。平成30年度に通級指導導入について検討を始めたときには、自閉傾向の生徒が受講することを想定していた。これまで通級指導を受講した生徒数及び令和4年度の受講希望者数に大きな増減は見られていないが、生徒の抱える困難の傾向には変化が生じている(図1)。衝動性や不注意を原因として「人間関係の形成」や

「コミュニケーション」に困難を抱える生徒も通級指導を必要としていることが三年間の経過で確認された。特別支援学校の学習指導要領解説自立活動編では「具体的な指導内容を考える際には児童生徒の実態を踏まえて、自立活動の様々な項目を関

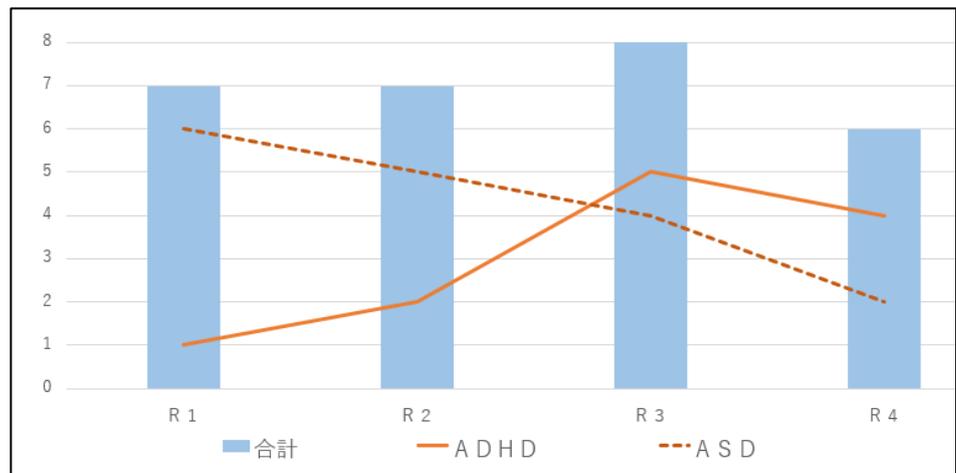


図1 通級指導の受講生徒数(希望者含む)

連付ける」ことが示されている。また、本校の生徒がねらいを達成するためには「心理的な安定」や「環境の把握」などに関連付けた指導が不可欠であるため、指導内容を検討する際には留意した。

## 7 通級指導の実践

生徒の実態に応じて1~3名でグループを編成し、指導者2人体制のチーム・ティーチングで指導を行っている。個別学習が授業の中心になるが、グループでの学習を適宜行うことで、個別で学んだことを共有したり人との関わり方を体験的に学んだりすることが

できる。人間関係の形成とコミュニケーションに対するトレーニングを行う上で、必要に応じ学習形態を変えられるメリットは大きい。通級指導では学校生活の困難を軽減するために「人の話を正確に聞き取ること」「自分の気持ちや考えを適切に伝えること」「相手の気持ちを考えること」を活動の柱とし、授業を行う際には以下のことに配慮した。

- ・他の生徒から見えない場所で活動する（写真1）。
- ・よさを伸ばし困難を改善する視点で指導する。
- ・対話による生徒の自己決定を大切にする。
- ・短い活動を複数組み合わせ、集中力の維持を図る。
- ・徐々に長い活動、難しい活動へ移行する。
- ・基本的な授業の流れをいつも同じにすることで、見通しを持たせる。
- ・聞く力、指示理解力の向上のため、活動内容はパターン化しない。



写真1 安心して活動できる場所

授業の導入として、日にちの確認と目標及び学習内容の説明を10分程度行った後でメインとなる活動は20～25分程度行い、最後に振り返りとして、授業日誌を記入する時間を設けた。書き

終えてから時間に余裕があるときには生徒が好きなことをする時間を取り入れて、トランプやUNOなど人と関わる遊びを主に行った。

## 7. 1 教材の作成

生徒一人一人に合った学習の内容を設定するために、困難の原因を探り、適切な教材や指導の方法を取り入れた授業を行った。

生徒の困難の原因に対して、一般的に有効とされる支援に基づいた教材を作成することを心掛けた。学習の目的を明確に示したりイラストを盛り込んだりすることで、生徒の意欲を喚起した。特性として多く見られる視覚優位な生徒、また、中には聴覚優位な生徒もいるため、適切な教材の作成と授業での関わりに留意した。

## 7. 2 年間を通して取り組んでいること

### (1) 日にちの確認

日にちや曜日を意識せず生活しており、見通しを持って生活することが苦手な生徒がいるため、授業では近い日程で行われる学校行事と関連付けて確認した。日にちの言い方（一日～十日、二十日）が定着していない生徒もいるため、コミュニケーション力の基礎として身に付けさせることが肝要であると考えた。例えば、教科の授業で「はつかまで提出しなさい」と教師から指示され場合、生徒にとっては「二十日」ではなく「八日」と認識していることがある。「はつかとはいつだろう？」と思っても、「人間関係の形成」と「コミュニケーション」に課題のある通級指導を受ける生徒が自ら質問して解決することは難しい。教師にとって、高校生が日にちの言い方を理解していないとの認識がないため、「指示に従わない生徒」「提出物を出さない意欲のない生徒」との評価につながりかねない。

また、日にちにまつわる季節的な行事や伝統文化についても話題にすることで、コミュニケーション力の向上に不可欠な言語概念の形成を目指した。

### (2) 認知機能を高める活動

認知機能（記憶、言語理解、注意、知覚、推論、判断）の強化のために開発されたトレ

ーニングを行った。書籍に課題の進め方が示されており、CD-ROMに収録されたプリントを使用するため、指導者は負担無く取り組める。学習の土台となる力を養成できた。

### (3) 遊びを通した学び

人との関係を構築することに課題のある生徒にとって、UNOやトランプなどの遊びからも多くの学びが得られた。

日頃から人間関係が希薄で限定的な生徒は、最初は硬い表情で黙々と活動する状態からスタートするが、回数を重ねるほど表情が和らぎ、一緒に活動することを楽しめるようになり関わりが増えた。また、生徒に何をするか決めさせることで、話し合いができるようになった。カードをシャッフルしたり、一枚ずつ順番にカードを配付したりする動作が難しい生徒は手指の巧緻性の向上が見られた。

### (4) 定期考査へ向けた取組

見通しを持つことが苦手な生徒が計画的に行動するための場、学習へのつまずきのある生徒が定期考査に対して意欲的に取り組むための時間として行った。考査前にはテスト勉強の計画を立て、勉強の仕方が身に付くよう通級指導担当者が支援した。考査へ向けた学習への取組が消極的な生徒に、評価の対象となる提出物に対し、ファイルの整理の仕方やノートやワークの書かれていない部分を通級指導担当者が一緒に確認するなどの支援を行ったところ、提出物を出すことに意識を向けられるようになった。

## 7. 3 生徒の特性に合わせて取り組んでいる授業及び支援の一例

### (1) 5W1Hカード

話を聞く、自分の考えを話す、自分の考えを文章にまとめるなどの練習をするときに、5W1Hカードを使用している（写真2）。個別に取り組むときには机の上に並べ、グループ活動で取り組むときにはホワイトボードに貼って活用した。会話を組み立てるのに必要な要素を生徒が把握できるようになった。話すことが苦手な生徒は、一度文章にまとめ、原稿を見て話すことから始めるが、活用することに慣れた生徒はカードを見て頭の中で文章をまとめるようになった。最終的にはカードがなくても情報を整理し、自分の意見を話せるようになったと実感する生徒が増えた。

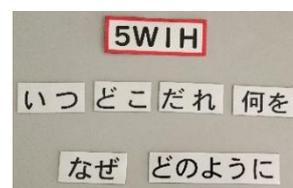


写真2 5W1Hカード

### (2) メモをする練習

大事なことを整理して書くことが苦手な生徒には、日々の生活でメモをする習慣が身に付いていない。そこで5W1Hを意識してメモをする練習を繰り返し行った。通級指導担当者が読み上げた原稿から、生徒が大事だと判断しメモすることができるよう、最初は5W1Hに添って書き込む欄を設けた紙に書き取る練習から始めた。次第に何も書かれていない紙に自由にメモをするよう段階を踏んで指導した。

話を聞くことに特に苦手意識が強く、集中力を持続することに難しさのある生徒の場合は興味関心に応じた事柄を取り入れながら、生徒同士が書いたことを伝え合ったりその内容を書き取ったりする学習から取り組んだ。

最初は自分のペースで読み上げたり、書き取ったりするためうまくいかなかったが、通級指導担当者が書き取れないときの言動を助言したところ、「少々お待ちください」「もう一度お願いします」「ゆっくりと話してください」など伝えられるようになり、相手のこと

を考えて活動できるようになった（写真3）。

相手に話すときは、相手のペースも考えゆくりと伝わりと伝えり  
 速に聞くときは相手の目を見て集中したり聞きのかしたり、  
 もう一度お願いすることも学んだ。

写真3 生徒の変容が表れた授業の振り返り

相手が話をしている時、大事なポイントが思った時はメモをとる  
 けれど、相手が話をしているとき、あいつもよかったです  
 うかいいというところから

(3) ソーシャルスキルトレーニング

良好な対人関係を維持するために、SST<sup>1</sup>を取り入れた。本校では通級指導受講の有無に関わらずコミュニケーションに課題のある生徒が多く在籍するため、相手の意図を汲み取れない言動から日常生活の中で生徒同士のトラブルに発展することがある。そのため、自他の考え方の違いに気付いたり、相手の意図に応じたふさわしい言動を考えたりするためにロールプレイを通じた学習を行った（図2，3）。

仲間に入りたいときの行動について、次の①～⑤を順番に並べてみましょう。

①その場面にふさわしい言葉を口にする	②相手の目をきちんと見る
③相手の近くに行く	④笑顔を意識する
⑤相手に聞こえる声で呼びかける	

生徒A 3→ 5→ 4→ 2→ 1                      生徒B 3→ 2→ 5→ 1→ 4

図2 自分とは違う考え方を知る学習

図3 相手の意図に応じた言動を考える学習

7. 4 達成感を味わわせるために

指導する上で、生徒の自己決定を大事にして取り組んだ。苦手なことにも生徒本人が自発的に取り組めるよう、少しずつ負荷を掛けながら肯定的な言葉掛けで促した。また、得意な活動を取り入れて苦手なことに挑戦できるようにした。自分の意思が伝えられない生

<sup>1</sup> ソーシャルスキルトレーニングの略。人間関係やコミュニケーションなどの社会性を学ぶ。

徒と一緒に、通級指導教室として使わせてもらった感謝の意を伝えるため、図書室の管理者へ「くす玉」を贈ることにした。色や吹き流しのデザインや素材に関して話し合いながら活動を進めた。出来上がった作品は図書室に飾ってもらい達成感を味わうことができた。(写真4)。

自分の言いたいことを伝えられないと感じている生徒は、自分の考えや気持ちを適切に表現する言葉が分からないために伝えられないことがよくある。そこで、語彙力を向上させるために「漢字しりとりバトル」と名付けた活動で他の生徒と競いながら熟語とその意味をセットで発表し合う授業を行い、主体的な活動のもと辞書の活用の仕方や言葉の意味を身に付けることができた。



写真4 生徒の作品

## 8 ユニバーサルデザインについて

### 8.1 授業のユニバーサルデザイン化

通級指導で身に付けた力を教科の授業で発揮できるようにするために、通級導入一年目から授業のユニバーサルデザイン化に取り組んできた。本校では通級指導を受ける生徒以外にも配慮を必要とする生徒が複数在籍しているため、学校全体として授業のユニバーサルデザイン化に取り組むことは全ての生徒にとって「あると便利なもの」である。

一年目はユニバーサルデザインの目標を3つ掲げ、それぞれの教科・科目でICTの活用と合わせて、分かりやすい授業作りを意識して取り組んだ。しかし、「敷居が高く取り組みにくかった」「具体的に何をすれば良いのか分からなかった」などの意見もあり、全ての教師が積極的に取り入れるまでに至らなかった。そこで、二年目からは、本校の生徒にとって有効と思われるユニバーサルデザインの視点を具体的に示し、各教科の担当者が自分の授業に必要なもの、有効と思われるものを取り入れることを提案した。「関わり方の工夫」「話し方の工夫」「時間の工夫」「板書の工夫」「プリントの工夫」「空間の工夫」「意欲を高める工夫」として7つのポイントを示し、それぞれに具体的な説明を添えたものを職員会議で配付した。7つのポイントは、職員室に置いてある書籍「通常学級ユニバーサルデザイン(佐藤慎二著 東洋館出版)」を参考に特別支援教育コーディネーターが提示することで、各教科の担当者が必要に応じて書籍を参照できるようにした。具体的にどのように取り入れるかについては各教科の担当者に委ねたが、特性のある生徒にとって見やすいフォントを紹介したり、生徒が抱える困難の傾向と具体的な支援について会議の場で話題にしたりすることで授業のヒントになるような提案をした。授業に取り入れられることの多かったポイントは、視覚的支援、時間の明確化、目標の明示、フォントの工夫であった。また、プリントには単元を超えて通し番号を振る、プリントは穴を開けてから配付する、科目毎にプリントの色やデザインを揃えるといった実践がなされるようになった。

### 8.2 考査前の取り組み

令和2年度から、定期考査の日程、試験範囲、提出物、提出先及び締め切りを一枚の紙にまとめて全校生徒に配付することを始めた(図4, 5)。

## 令和2年度 前期期末考査日程

1校時 8:50～ 9:40  
2校時 9:55～10:45

3校時 11:00～11:50  
4校時 12:05～12:55

	9月24日(木)			9月25日(金)			9月28日(月)			9月29日(火)		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1学年	化学基礎	国語総合		社会と情報	C英 I	家庭総合	英語表現 I	数学 I		保健	地理A	
2学年	現代文B	数学 II	古典A	世界史A	保健	C英 II	生物基礎	AB	A	英語表現 I	家庭総合	
3学年	現代社会	EF	F	現代文B	地学基礎		C英 II	国語表現		日本史A	CD	

- ・ 2時間目以降、考査のない生徒は考査が終わり次第帰宅すること。
- ・ バス時間の関係等で帰れない場合は 3年生は会議室、2年生は美術室、1年生は生物化学室で自習をすること。
- ・ 各科目の考査実施状況は下記のとおり。

○2年生 考査実施状況

群	科目	担当	人	使用教室	群	科目	担当	人	使用教室
AB	介護福祉基礎	川嶋、伊藤	7	選択5	A	情報処理	高幸、加藤	15	コンピュータ室
AB	日本史B	鈴木豊	1	選択5					
AB	ビジネス基礎	高幸	15	コンピュータ室					選択者数 15

図 4 考査の日程

## 前期期末考査 試験範囲・提出物一覧（2学年）

試験実施日	科目	試験範囲	提出物・備考・その他注意事項	提出先・〆切
9月24日 (木)	現代文B	・水かまきり ・コンコルドの誤り ・想像する力	授業プリントを全てファイルに とじて提出すること。	考査終了後、廊下の箱に提出。
	数学 II	・データの分析 ・教科書 p8～p25	ニューファースト回収	9月24日考査後回収
	古典A	①徒然草 プリント 2枚 序段 「つれづれなるままに」 117段 「友とするにわるきもの」 92段 「ある人、弓射ることをならふ」 ②校歌 プリント ③辞書を引く「形容詞」プリント ④古今和歌集 仮名序 プリント ⑤百人一首プリント ※範囲の詳細は、授業でプリント配布します。	春休み・夏休み・授業で配布した 全てのプリント、授業用のノ ート、テスト勉強したMy学習 ノートなど、全て提出してくだ さい。	〆切は考査日、9月24 日。 職員室前の回収BOXへ。
9月25日 (金)	世界史A	教科書 p74～123	これまでの授業プリント	世界史の考査後に伊藤伸に 提出
	保健	教科書 p.64～79 ノート p.62～77	授業プリント ノート	考査終了後、廊下の回収 BOXへ
	コミュニケ ーション	教科書 Lesson7.8	ワーク・ファイル回収	考査終了後、廊下の回収 BOXへ

図 5 試験範囲・提出物一覧

通級導入当初、考査の範囲は教科毎に紙に書いて配付していた。しかし、生徒によって

は、物の管理が苦手であり、紙を渡されてもすぐに紛失してしまったり、机の中に入りっぱなしの他のプリントと同化してしまったりして、上手に活用できずにいる様子が見受けられた。また、教科毎に対応が違うため、担任や特別支援教育コーディネーター、通級指導担当者が必要な支援を行おうとしても、生徒自身が情報を把握できていないために、個別に教科担当者に確認する必要が生じていた。

物の管理が苦手な生徒でも扱いやすいようにするために、以下の3点を重視した。

- (1) 必要な情報を一枚の紙にまとめた。
- (2) 色の付いた厚紙に印刷して配付することで、他のプリント類と区別しやすくした。
- (3) 不注意から範囲を間違えるリスクを考慮し、テスト毎に紙の色を変えることとした。

範囲と提出物を一覧で示すことで、生徒にとって分かりやすくなったのはもちろんのことであるが、教師にとっても声掛けや支援を行いやすくなった。

## 9 研究のまとめ

### 9.1 成果

#### (1) 生徒の成長

通級指導を受けるきっかけとなった困難が改善され、人間関係の形成、コミュニケーションに対する力が高まった。また、自分のよさや成長を肯定的に受け止められるようになり、何事にも考えて取り組むようになった。一年目に受講した生徒全員が単位修得を果たした。二年目は卒業後の生活に必要な力を身に付け、進路を達成することができた。小学校段階から授業に集中できずにいた生徒の学習意欲の向上や、人間関係が構築できずにいた生徒の望ましい言動の獲得など、生活の安定につながる成長が見られた。日々の学習や将来に向けた目標を持てるようになり、将来に希望を持ち日々を生きていこうとする意欲が育った（写真6）。

6 あすなるスタディを受ける前と比べて、今のあなたはどのように変わりましたか？
人の目を見て話せるようになった。授業を受けてバイト
の人や家族とのコミュニケーションが増えた。少しは、なにか
のためにがんばろうと思えるようになった。色々な人と前
よりは、話せるようになった。世の中のことを考えること
が多くなった。今までは、何人のために勉強するのが
わかってなかったけど勉強がどれだけ大事か教えて
もらって前よりも勉強をするようになりました。

写真6 生徒の成長と意識の変容

## (2) 教職員の意識の変化

通級指導を始める前は、生徒の抱える困難に教職員の目が行きがちであったが、通級指導や授業のユニバーサルデザイン化を推進してからは困難を抱える生徒に対し「困った生徒」ではなく「頑張っている生徒」と受け止める教職員が増え、生徒のよさに意識が向くようになった（写真7）。



写真7 教職員の意識の変化が現れた話合いの記録（枠囲みは生徒のよさ）

また、頑張っている生徒に対して、授業だけでなく生活の様々な場面で適切な支援や関わりが行われることが多く見られるようになった。

## (3) 専門性の向上

教師集団の専門性の向上を支えるものとして、研修会の実施の意義は非常に大きい。令和元年度は本校の通級指導導入の際に多くのこと参考にさせていただいた通級指導の先進校である、山形県立新庄北高等学校最上校教諭の結城浩子先生から実践に関する講話をいただいた。また、宮城県立角田支援学校教諭（現在は広瀬高等学校教諭）の加茂純先生を講師とし、通級指導への理解を深める研修会を実施した。令和2年度は宮城学院女子大学教授の梅田真理先生を講師とし、発達障害の理解と対応に関する研修会を実施した（写真8）。令和3年度は蔵王町内の中学校の先生方と合同で東北大学大学院の川崎聡大先生から発達障害に関する講義をしていただき、実際に困難を抱える生徒に対する事例検討会を行った。特別支援教育への理解の輪が少しずつ広がりつつあるため、今後も時機を捉えた研修会を継続的に実施していく必要がある。また、ユニバーサルデザインについても町内の中学校と合同で研修会を開催する予定であり、切れ目のない支援体制の構築への第一歩につながるものと期待する。



写真8 教職員向けの研修会の様子

## 9. 2 課題

### (1) 通級指導を受けていない生徒への働き掛け

授業においてはユニバーサルデザインが積極的に行われるようになり、誰にとっても分かりやすいものが工夫されるようになったが、人間関係の形成及びコミュニケーションに困難を抱える通級指導を受けていない生徒への指導・支援の在り方が課題である。通級指

導は、本人・保護者が希望しない場合には実施することは難しい。そのため、学校で取り組んでいる p 4 c (philosophy for children) や M A P (みやぎアドベンチャープログラム) などを通して、在籍する全ての生徒のコミュニケーション力の向上を図ることが肝要であると考える。

## (2) 他機関との連携と就労支援

就職活動及び定着して働き続けることへの困難が予想される生徒の場合、障害者手帳の取得や障害枠での就労について本人・保護者と必要性を検討することも考えていかなければならない。手帳の取得は申請から取得まで時間を要する。また、障害枠での雇用では多くのケースで本人の職業への適性や企業とのマッチングについて判断するために実習が必要となる。高等学校では実習期間中の出欠の扱い等に課題があり、在学中に行うことが難しい。これらのことに対応し卒業までに確実に就労につなげるためには、遅くとも2年生から障害者手帳の取得や障害者就業・生活支援センターと連携した取り組みが必要であると考えている。障害者手帳を活用した就職活動は支援学校の取組が参考になる。生徒の個に応じた自立を実現するために、広い視点で他機関と連携していくことが重要である。現在、本校では本人・保護者の意向を確認し実習に向けて外部機関からの協力を得ながら準備を進めているところである。

## 10 おわりに

通級指導で個別のトレーニングを行うこと、更に教職員の理解と協力を得て授業にユニバーサルデザインを取り入れることは、困難を克服し意欲を持って主体的に学ぶ生徒の育成に有効であることが確認できた。更に、全ての生徒にとって分かる授業は落ち着いて授業を受けることにつながり、学校全体の雰囲気が変わったと感じている。今後高等学校においてこれらの取組が推進されていくことは、生徒の可能性を広げる一助になるであろう。

※本稿は、本人・家族の承諾を得て、掲載しています。

### <参考文献>

- ・「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」  
文部科学省（平成30年3月）
- ・「改訂第3版 障害に応じた通級による指導の手引き 解説とQ&A」  
文部科学省編著（平成30年8月）海文堂
- ・「高等学校学習指導要領」 文部科学省（平成30年3月）
- ・「コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」  
宮口孝治（2017）三輪書店
- ・「実践 通常学級ユニバーサルデザインⅡ 授業づくりのポイントと保護者との連携」  
佐藤慎二（2015）東洋館出版社